# 信大の「先端心臓血管病センター」

# 最新治療スクラム

## 内科・外科・小児科 垣根を越えて

人工弁に

人工心肺装置（右手前）を使った心臓弁膜症の手術。医師や看護師らが連携し、傷んだ弁を人工弁に置き換えた

患部を見つめ、手術に取り組む心臓血管外科チーム

信大病院（松本市）の「先端心臓血管病センター」外来が始まって半年が過ぎた。九つの専門外来やCCU（冠動脈疾患集中治療室）を備え、内科、外科、小児科が、垣根を越えて連携。心臓血管病の患者にとって、総合的な「窓口」となるセンターには現在、月約四百人が訪れている。全国的にも充実した内容で、連日、最先端の検査・治療技術を駆使した治療が行われている。

外科部門の手術室。心臓弁膜症の患者が横たわり、開かれた胸の中で、ピンク色の心臓が鼓動していた。左心室から全身に血液を送り出す上行大動脈の太さに驚かされる。

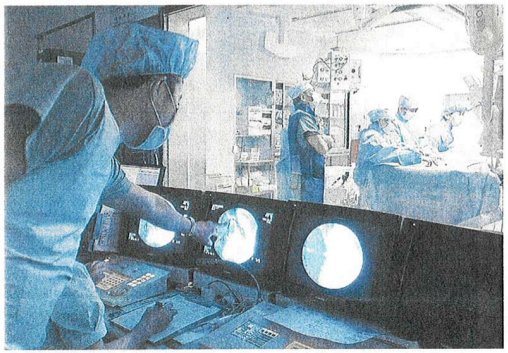
傷んだ二つの弁を人工弁に置換するため、呼吸と心臓を止めた。人工心肺装置が稼働し始め、張り詰めた空気が流れた。

一方、内科系列では、心臓の三次元画像を描き出す最先端のカルト「海図」システム」を使った「心筋焼灼（しょうしゃく）術」が、不整脈の治療に導入され、成果を上げている。

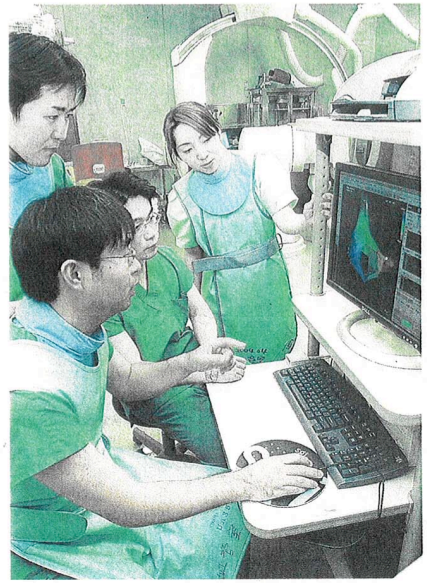
狭心症、心筋梗塞（こうそく）の患部（冠動脈）を押し広げ、閉塞（へいそく）の金網でささえる「ステント療法」も、再び患部が狭まる再狭窄（きょうさく）の極めて少ないものに進歩した。

新しい血管をつくり出す、再生医療の臨床応用も始まった。十月一日には、CCUも入った救命救急センターがオープンし、救急患者の受け入れ態勢も充実させた。

文・飯島 裕一
写真・毛利 英俊



心筋梗塞患者のカテーテル（細管）治療。手前のモニター画面にも、患部の様子が映し出されている



3次元画像

最先端のカルトシステムで得られた3次元画像を見ながら、治療法を検討する循環器内科のスタッフ

診療科の垣根を越えて治療に当たる先端心臓血管病センターの病棟

10月にオープンしたばかりの救命救急センターで、朝の引き継ぎをする看護師。同センターに、新たに3床のCCUを設けた